

若手・中堅教員の授業力向上につながる研究実践報告 —理論と実践の往還を重視した支援と成果のアウトプットを通して—

教科教育室	加越佐稲根	藤智伯葉岸	伸亮知正	弥平子和漂	飛坂大和渡	田本口田部	善定愛知靖	広生子子司	松参田清矢	田河頭水畠	詩厚和裕祐	織史美士子
-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

1 研究の目的

近年の社会情勢の変化に伴い、学校や教師を取り巻く状況も大きく変化している。中央教育審議会が示す、教職生涯を通じて学び続け、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての教師像の実現には、各学校の教育課題に応じて主体的、協働的に研修を深めていく必要がある。そこで、研修参加者主体の、理論と実践の往還を重視した研修支援を行い、研究成果のアウトプットを通して若手・中堅教員の授業力向上を図ることを目的として本研究に取り組んだ。

2 研究の内容

(1) 教育研究の伴走型支援

1年次には、指導主事が教育研究を伴走的に支援するポイントとして、「学び手主体」「気付きを起こす」「対話を重視」の三点に絞って支援を行った。課題研究計画の検討や中間報告等においては、研修参加者同士がアドバイスし合う時間を確保した。受け身の研修から、研修参加者が主体となる研修になるよう、指導主事自身も研修観の転換を図った。その結果、研修参加者は主体的に学ぶことの意義を実感しながら、自ら考えることで、学びをマネジメントしつつ研修を進めることができた。このような伴走型支援を更に充実させることができ、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて必要である。愛媛県立新居浜東高等学校白石千明教諭による実践事例1では、講座において指導主事と対話しながら進めた実験の成果を、勤務校での指導に生かして、自らが伴走者として生徒の学びに寄り添った。学び手主体で課題解決が行われるように対話を重視しながら、自主性を尊重した助言を行うことで、生徒の主体性や科学的思考力を育成した。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

2年次には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点として、「見方・考え方を働かせる」「汎用的知識・概念の獲得や形成」を中心に、研修参加者の支援に取り組んだ。各教科等の学習指導要領解説に示されている「見方・考え方」を働かせるとは、事象の意味や本質、他との関連性を、捉えたり問い合わせたりすることであり、深い学びの実現の鍵である。また、学んだことを単なる知識として終わらせるのではなく、単元や学年、教科等の枠組みを超えて活用できる汎用的知識・概念とすることが、全ての子供が学ぶ力を発揮し、子供自身が学ぼうとする教育につながると考える。伊予市立中山中学校横山勇二教諭による実践事例2では、数学的な見方・考え方を働かせる数学的活動を重視し、統合的・発展的に考察する力の育成を目指した。問い合わせ型学習課題の設定や振り返りシートの活用等により、生徒が単元を横断して既習の知識を活用する有用性に気付き、学びを深める姿が見られた。また、「知識構成型ジグソー法」を生徒の実態に応じて実践することで、対話を通して「自らの思考を整理し、他者に伝えよう」とする態度が育まれた。このことは、理論と実践の往還による、汎用的知識・概念の形成に向けた授業改善の成果と考えられる。

3 研究のまとめ

若手・中堅教員の教育研究において、伴走型支援の充実と、理論と実践の往還による授業改善を目指して、2か年継続して研究に取り組んだ。相互の対話を重視し、研修参加者主体の研修とすることを意識して研修を実施した。その結果、主体的に学ぶ研修の意義が研修参加者に実感され、研修での学びが学校での指導に生かされた。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を基盤として、指導主事が課題研究の支援に取り組むことで、研修参加者による汎用的知識・概念の獲得や形成につながる授業実践が行われた。研修参加者が自律的に学びを深めた様々な取組は、「新たな教師の学びの姿」として示される、主体的に学び続ける教師の学びの実現につながるものである。伴走型支援を更に充実させるとともに、研究成果のアウトプットを通して若手・中堅教員の授業力向上につなげていきたい。